

何が幸いか

ルカによる福音書だけに載っている特殊記事とよばれるものを取り上げて、続けて御言葉に聴いています。今日の箇所は、「真の幸い」という小見出しが新共同訳聖書にはつけられています。内容はイエスさまが話をしておられると、それを聴いていた群衆の中から一人の女性が、感極まって、でしょうか。イエスさまにむかって「何と幸いなことでしょう。あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」と、いかにも女性らしい仕方の合いの手を入れたのです。するとイエスさまは、このあたりライブ感覚だな—と思うのですが、話を中断してすかさず「いや、むしろ幸いなのは、神さまの言葉を聴き、それを守る人なのだ」と返したという、そういう記事です。3節程度の短いものです。先月、9月の月間予定表の礼拝予定を考えているとき、マルタとマリアの次の、ルカの特長記事はと頁をめくっていて、この箇所だったわけですが、正直、一瞬飛ばそうかと思いました。短いし、読めばわかる気がしたのです。しかし、やはり福音書記者ルカがわざわざこの記事を加えたのには意味があるだろうし、それをルカ福音書全体の流れから浮かび上がらせるのが、今回の目的であったことを思い起こして心を改めた次第です。

そう思い直してあらためてこの記事を福音書全体の流れの中に位置づけてみると幾つものことが浮かび上がってきました。ルカによる福音書の特色として研究者が指摘するのは女性がマルコやマタイに比べると、おおきく取り上げられていることです。全体的に見て社会的弱者への視点が強い。今日の箇所でも、イエスさまに祝福の言葉を投げかけるのは女性です。この福音書の1章2章は、まず洗礼者ヨハネの母となったエリザベツと主イエスの母となったマリアのそれぞれの受胎告知と出産から

始められています。最初に女性たちから紐解いてゆくのですね。ただこういう流れは旧約聖書でも一番の英雄に数えられるダビデ王が登場するサムエル記の前にルツ記が置かれ、モアブの婦人ルツの献身がダビデの家系図に繋がられていることを考えれば福音書記者ルカの独創というわけではないでしょう。洗礼者ヨハネとキリスト・イエスの誕生を女性たちから説き起こす。彼女たちの思いがクローズアップされています。このあたりが福音書記者ルカの巧さという気がします。ストーリーテラーなのです。とくに、エリザベツと祭司ザカリヤのあいだに長く子どもが与えられなかったことは、これも旧約時代の父祖アブラハムの妻サラや、サムエルの母となったハンナのような女性たちの系譜を引いていることがわかります。現代でもデリケートな問題ですが、とくに古代社会では家族単位での生存は難しく、血族集団がまとまって相互援助をするのが生き残るための戦略でしたし、医療の手段が発達せず死亡率も高かったので、たくさん子どもを産むことが女性には求められました。アブラハムに神が約束された祝福の内容が土地を与えることと子孫繁栄だったこと、空の星が数えられないように、砂漠の砂の粒が数えられないように増えるという祝福だったことを思えば子どもが与えられなかった女性の辛さが分かります。今日のように産まない自由や結婚しない選択もあるような時代ではなかったのです。この箇所ではある女が群衆の中から声高らかに叫ぶ。「なんと幸いなことでしょう。あなたを宿した胎。あなたが吸った乳房は！」という言葉は、この女性に子どもが与えられずに、ああ、羨ましいなあという気持ちが思わず声になってしまったのか。それとも自分にはたくさん子どもが与えられたけれども、一人もこんな立派な人物にはならなかったなあ、という気持ちからなのか。純粹に、このような人物の母親

になれた方の幸運を思ったのか、このあたりはどうでしょうね。ちょっと穿った見方でしょうか。ただこの女性の讚美といえますか、感極まったの叫びは、ルカ福音書 1 章の受胎告知を受けたマリアが賛美した歌がありますね。マグニフィカートとして知られる歌です。あそこにつながっています。「わたしの魂は主を崇め、わたしの霊は救い主である主を讃えます。身分の低いこのはしためにも、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者というでしょう。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから」と続くあの讚美が成就している。まさにマリアが歌った通りのことがこの場で起きている。「いかに幸いなことでしょう。あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」と、ああ、あなたは女の中で祝福された方だ、と声高らかに言われたわけですね。こういうところにルカの筆はきちんと及んでいる。神さまのご計画の確かさが明らかにされてゆく。そこをわたしたちはこの箇所から読み取らなければなりません。と、同時にそれだけでは終わらないわけです。もしかしたら、わたしたちは自分の願いや願望に「幸いだ」という言葉を添わせているだけかもしれない。何が幸いか、ということについて、イエスさまが間髪を入れずに、すぐに返球されたのはそこだったのではないか。卓球の高速ラリーみたいな感じです。相手の発言に覆いかぶせるようにして、身内を褒められた、幸いだ！というベクトルを修正する、神に向かわせるのです。ここをわたしたちも考えなければならない。わたしたちも今を生きているなかで、幸いだという表現をするかどうかは別にして、何を幸福と思うか。その幸福であるという内容というか、実体というか、その中身はなんであるか、どちらのほうを向いているかを考えてみる必要がある。自分の願いに「幸い」という言葉を添わせているのであれば、自分が金だと

思っているものがメッキであるかもしれない。真実の幸福と考えるものが思い込みで肝腎な場面で支えることが出来ない場合、さらに時代が変われば幸福の内容も代わります。国全体が数百年単位で占領下に置かれ、解放を待ち望み、メシアが待望されていた古代ユダヤと、まがりなりにもシステムが複雑に構築されて動いている現代日本では、人々が求める希望や幸福に最大公約数を求めること自体が難しいでしょう。天下国家を論じる向きは少なく、わたしたちの幸福や幸いは自分の身の回りのごく個人的な事柄に限定されているのが正直なところでしょう。そもそも救世主が待望されるような、英雄が必要とされる時代は不幸であるという言葉もあるくらいですから、わたしたちは相対的に幸せな時代を生きているのだということも出来ます。しかし、だからこそ全体とつながる感覚を麻痺させてしまうことの危険性があるようにも、今回、この御言葉に聴いていて感じさせられました。群衆の中から声高らかに叫んだ女性は当時の女性の幸福についての考えを率直に言い表しました。それがあの時代の最大の女性の名誉であり、幸福だったのです。家や親族の名誉が非常に重んじられた社会だった。イエスさまの活躍は彼らの親族の名誉とも関わっていて、あの男は気が変になっているという噂を聞いて、親族が取り押さえに来たという記事も福音書には記されていましたね。そういう時代の「幸いな」理解に対して、イエスさまは全く違ったことを仰られたのです。28節「しかし、イエスは言われた。『むしろ、幸いなのは神の言葉に聴き、それを守る人である』」、これがイエスさまが指し示した幸いの中身・内実なのです。このイエスさまのお答え自体は格別に独特なものというわけではありません。旧約聖書詩篇の第一編が神の言葉に聴き従う者の幸いをうたって欠けるところがありません。「いかに幸いなことか、神に逆らう者の

計らいにしたがって歩まず、罪ある者の道に留まらず、傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木、時が巡りくれば実を結び、その葉もしおれることがない」と歌われています。ただ、このように歌われていること自体が、幸いなことの内容がずれていることを示しているのではないか。実際のわたしたちははかりごとをめぐらし、神無き者のごとく振る舞い、自分を世界の中心におく傲慢さから自由ではない。だからこそ、詩篇の作者はほんとうの幸いは神の言葉とともに生きることであると、呼吸のように神の言葉まなび、口ずさむ人の平安と繁栄をうたったと考えることができます。やはり、わたしたちは徹底的に現世的にできているのだと思います。この世に生きている自分を思い描くことしか出来ないでいる。そういう問題を抱えているのです。わたしは今日与えられた聖書箇所が福音だと思わされたのは、そういうこの世的な価値観でしかはかれない者たちに、地上に来て下さった神のご自身、「むしろ幸いなのは神の言葉に聴き、それを守る人である」と宣言されたことです。女性の考える幸いに上書きをされた。書道でいうと先生が朱筆で上から直される感じでしょうか。あなたが幸いだと讚美していることが、もし、神さまとつながっていないならば、それは本当の幸いだろうか。あなた自身の幸いは神の言葉につながり、神の言葉に守られていることにあるのだと、神の国の訪れを告げる方が語っておられる。当然、神の言葉とは、キリスト・イエスご自身をも指しています。むしろ、幸いなのは、ですから、わたしの言葉を聴き、それを守る人なのだという宣言をなされた。群衆の中から、このような偉大な人物を生み出した母親への讚美の声が上がり、なんとという幸福だろう、という叫びに、イエスさまは、あなたの幸いはわたしに聴き、その

言葉を生涯守って生きることにあるのだと教えられた。ここに救い主の御業が示されています。救いはほんとうに単純なことで、目の前のおられるイエスさまの言葉を聴くこと、それはマルタの妹であったマリアが、彼女の妹であることを放棄してまで選択した道でもありました。そういう聴き方、主の御前に自分を投げ出して自分を耳にするような、心の中にイエスさまの御言葉を植え付けていくような聴き方、お言葉を守ることは、その御言葉に自分を委ねる聴き方をすることでしょう。すると、御言葉が、あなたを持ち運ぶようになる。あなたは一人ではない。独りなどありえない。救い主イエスを通して、天に父をもち、愛する子として生き始める神さまの恵みのご支配の中の住人とされている。それこそが、イエスさまの言われる幸いな人、神との関わりを保って実らされていく人生を歩むことの許された恵みの生き方であるとルカは伝えたかったのです。主イエスのこの語りかけに聴き、その内に留まる歩みを願います。

お祈りいたします。